

原著論文

〈貧困の文化〉論・再考

—H. ガンズによる批判を手がかりに—

益 田 仁

(長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科)

Reconsidering the ‘Culture of Poverty’ Theory:

Focusing on H. Gans’ Criticism

Jin MASUDA

(Dept. of Social Work, Faculty of Human and Social Studies,  
Nagasaki International University)

Abstract

The purpose of this paper is to reconsider the ‘Culture of Poverty’ theory which advocated by O.Lewis in 1960s. To accomplish the purpose, here I sort out an issue of the ‘Culture of Poverty’ theory first, confirm how it was received in the U.S. society next, and consider criticism, especially by H. Gans, to the theory.

As a result, the following become clear: (1) ‘Culture of Poverty’ theory was misunderstood by way of *Another America* (M. Harrinton), which interested people and the government to the poverty on the one hand, but describe the poor’s pathologic behavior on the other. (2) What Gans criticised was taken something into consideration by Lewis. (3) Lewis struggled to perceive the poor’s whole life, and sought after the way by which ‘Culture of Poverty’ is vanished, but not ‘Poverty’ itself.

Key words

‘Culture of Poverty’ theory, O. Lewis, H. Gans

要 旨

本稿の目的は、O. ルイスによって1960年代に提唱された〈貧困の文化〉論の意義を改めて考えることである。そのための方法として、まずは〈貧困の文化〉論の論点を整理したうえで、それが当時どのような形で「受容」されたのかを確認した後、〈貧困の文化〉論への批判—特に、H. ガンズによる批判—を検討した。

〈貧困の文化〉論は、60年代アメリカの「貧困戦争」における具体的な政策プログラムの指針・根拠となった一方で、それが社会に広まる過程でルイスの意図が見落とされ、一面的な理解がなされた。また、H. ガンズによる〈貧困の文化〉論批判は、一見すると〈貧困の文化〉論への死亡宣告のようにも思えるのだが、しかしルイスの著作を丁寧に検討すると、〈貧困の文化〉論にはガンズによる批判の論点が既に含まれていたのである。

それらを踏まえ、ルイスは「貧困」というよりむしろ、“貧困を生きる人間”を考えようとしてきたことを指摘した。

キーワード

〈貧困の文化〉論、O. ルイス、H. ガンズ

## 1. はじめに

本稿の目的は、米国の人類学者・Oscar Lewis (以下、ルイスと表記) によって提唱された〈貧困の文化 Culture of Poverty〉論の要点と意義を改めて確認することである。

1960年代初頭にルイスによって提示された〈貧困の文化〉論は、学术界のみならず、政策立案者から市井の人々まで多様な人々によって読まれ、多くの人々の貧困観を変えていった。さらにそれは、ジョンソン大統領の下でなされた「偉大な社会 GREAT SOCIETY」計画の一環である「貧困戦争 War on Poverty」の具体的プログラムの根拠の一つとされ、実際の救貧政策にも多大な影響を及ぼしてきた。

しかし一方で、〈貧困の文化〉論には一それが拡散したからというよりむしろ、それが必然的にもつ政治性のために一多数多くの批判も投げかけられてきた。例えば C. Valentine は、〈貧困の文化〉論を、貧しい原因を貧しい人々に帰す中産階級的な理由付けだとし、その視点の背後にある階級性と、それが結果的にもつ役割を厳しく非難している (Valentine 1968)。

詳しくは後述するが、〈貧困の文化〉をめぐる論争は「多くの社会学者たちが〈貧困の文化〉概念がもつ適応の側面だけを重視した」(Wilson 1987=1999: 305) がゆえに、〈貧困の文化〉論が、ルイスの意図とは異なった形で理解され定着してしまったとひとまず整理しうる。

ルイスが1970年に他界してしまったことも相まって、それ以降、〈貧困の文化〉論は時代遅れの理論として「見捨てられ」(Harding et al. 2010: 6) るか、あるいはその理論が「過度に単純化されて (中略) 貧困層は救いようがないので財政援助に値しないことを示すのに用いられ」(Gans 1982=2006: 225) るかのどちらかであった。

しかし、ルイスが〈貧困の文化〉論で強調していた視点はそもそも何だったのだろうか。そして、〈貧困の文化〉論はどのように誤読され、どのように単純化されていったのだろうか。さ

らに、〈貧困の文化〉をめぐる論争ではどのような点が論点となったのだろうか。

福祉国家の後退と相関して前景化してきた貧困問題を背景として、貧困と文化とを結びつけて考える取り組み—〈貧困の文化〉再考の動き—が見られる昨今<sup>1)</sup>、〈貧困の文化〉論の要点と論争点を再度確認しておくことは、貧困と文化の関係性を改めて考えるうえで重要な基礎的作業であろう。

本稿では、そうしたねらいのもと、まずは〈貧困の文化〉論の概要を整理した上で (2)、それがどのように受容されたのかを振り返り (3)、論争の争点を洗い出し (4)、H. Gans (以下、ガンズと表記) による〈貧困の文化〉論批判を手がかりとして〈貧困の文化〉論を再考することで (5)、その現代的な意義を考えてみたい (6)。

## 2. 〈貧困の文化〉論とは

まずは O. ルイスの略歴を概観することにより、〈貧困の文化〉論の背景を確認しておきたい。

ルイスは1914年、ラビ (イスラム教の宗教的指導者) の息子としてニューヨーク市に生まれる。1936年、ニューヨーク市立大で歴史学の学位取得した後、コロンビア大学大学院に進学する。しかし、当時の歴史学科に落胆し、R. ベネディクト (当時のコロンビア大学の人類学スタッフ) に相談して転科を決意。1940年、「ブラックフィートに住むインディアンの文化と白人との接触に関する研究」で博士号 (人類学・コロンビア大) 取得した後、メキシコにある全米インディアン研究所を経て、ブルックリン大学、ワシントン大学、イリノイ大学で教鞭を執っている。1970年、心疾患により他界。享年55歳であった<sup>2)</sup>。

ルイスの主要業績を時系列に並べてみると (表1)、メキシコの村落、米国都市部への移住者が多くみられた時代のプエルトリコ、革命期のキューバと、数多くのフィールドで調査を行っ

表1 O. ルイス 主要業績一覧

No.	出版年	書名	邦訳書名	訳者	邦訳書出版年
1	1951	Life in a Mexican village: Tepoztlán restudied	なし	—	—
2	1958	Village life in northern India: studies in a Delhi village	なし	—	—
3	1959	Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty	貧困の文化—メキシコの〈五つの家族〉	高山智博・染谷臣道・宮本勝	1985 (2003年筑摩書房より復刻)
4	1960	Tepoztlán: Village in Mexico	なし	—	—
5	1961	The Children of Sanchez: Autobiography of a Mexican Family	サンチェスの子供たち 1～2	柴田稔彦・行方昭夫	1969
6	1964	Pedro Martinez: A Mexican Peasant and His Family	なし	—	—
7	1965-66	La Vida: A Puerto Rican Family in the Culture of Poverty - San Juan and New York	ラ・ビーダ 1～3	行方昭夫・上島建吉	1970-71
8	1969	A Death in the Sánchez Family	なし	—	—
9	1970	Anthropological Essays	なし	—	—
10	1977	Four Men: Living the Revolution	キューバ革命の時代を生きた四人の男—スラムと貧困 現代キューバの口述史	江口信清	2007

ていることが分かる。

ルイスが〈貧困の文化〉という言葉をはじめて用いたのは1959年に出版された *Five Families* においてであり、その概念は以降のルイスの実地調査のたびに書き換えられていった。ルイスの著作は、ひたすらに得られたデータを羅列するという特徴があり、〈貧困の文化〉論が著作において中心的に論じられたことは一度もなかった。しかし、1965年に出版された *La Vida* においては、珍しくその理論が体系的に整理され、理論的に考察されている。その理論のエッセンスを松岡陽子は次の16点に集約しているので、ひとまずは松岡 (2001) にならひ、以下列記する。

【貧困の文化論】(松岡 2001: 37-38より抜粋、

一部標記を改変、下線は筆者)

1. 〈貧困の文化〉とは貧困とそれに伴う諸性質を持ち、それ自体の構造と根本原理を持つサブカルチャー (部分文化) である。
2. 〈貧困の文化〉は、著しく安定して根強く、世代から世代へ受け継がれていく、一つの生活様式をもつ。
3. 〈貧困の文化〉は、ある積極的意味を持つものであり、それなしには貧困者はとうてい存続できないようなある報酬もたらす。
4. 〈貧困の文化〉は、地域的、民俗—都市的、あるいは国民的差異を超え、家族構成、対人関係、時間的定位感、価値体系、消費型に著しい類似性を示す。

5. 〈貧困の文化〉は、さまざまな歴史的文脈のなかで生じる。しかしそれが成長発達する傾向を示すのはある一連の条件をそなえた社会においてである。
- 1) 貨幣経済、賃金労働、利潤のための生産
  - 2) 未熟練労働に関しては、慢性的に高率を示している失業と不完全雇用
  - 3) 低賃金
  - 4) 低所得者に対して、社会的・政治的・経済的組織が与えられていないこと
  - 5) 単性系譜よりもむしろ両性系譜による親族関係が存続すること
  - 6) 富と財産の蓄積、昇進の可能性、儉約を強調し、低い経済状態を個人の能力の欠如や劣等性の結果と見なすような価値体系が支配階級に存在すること
6. 〈貧困の文化〉には、約70の互いに関連する社会的・経済的・心理的特性が確認される。例えば経済的特性は、失業と不完全雇用、低賃金、未熟練職業の寄せ集め、子供の労働、貯蓄の欠如などが、また社会的・心理的特性は人口過密、プライバシーの欠如、群集性、高いアルコール依存、暴力などがあげられる。また、その特性の数と、それらの相互関係は社会により、家族により変化し得る。
7. 〈貧困の文化〉は、成層化し、高度に発達した資本主義社会における貧困者が、自らの周辺的な地位に対して示す適応と反発である。それは、より多い社会が価値あるものとして目標としているような成功を勝ちとることはとうてい不可能であると認識した結果生じる、あきらめと絶望感に立ち向かおうとする努力を表現している。
8. 〈貧困の文化〉がひとたび産み出されると、子供たちへの影響により世代から世代へと存続してゆく。スラムの子供たちはたいてい6、7歳になれば、貧困の文

化の基本的価値と態度が染み込んでおり、それらを打開する柔軟性を失っている。

9. 〈貧困の文化〉が発達するのがもっとも頻繁に見られるのは社会的、経済的体系が崩壊しつつあるとき、または別の体系にとって変わられようとするときである。
10. 〈貧困の文化〉を担う第一の候補者は急速に変化しつつある社会の低階層出身者で、すでに部分的にせよ、社会から阻害されている人々である。
11. 〈貧困の文化〉に属する人々は、より大きな社会の主な制度機構に有効な形で参加し、融合していない。
12. 〈貧困の文化〉に属する人々は、中産階級的な価値を認識しており、それについて語り、それらのあるものは自分たちのものとさえ主張するが、全体としてそれに則って生活することはない。
13. 〈貧困の文化〉の状況下では、大家族のレベルを超える組織は最小限しかない。
14. 〈貧困の文化〉に属する人々は、人生の周期の中で特に長期の、保護下にある段階としての子供時代が欠けている。
15. 〈貧困の文化〉に属する人々は、強い周辺性意識、絶望感、依頼心、劣等感を持つ。
16. 貧困と〈貧困の文化〉は異なり、非常に貧しい層を構成しながら、貧困の文化とは言えない生活様式を守っている例がある。例えば、未開民族、インドにおける低いカーストの人々、東ヨーロッパのユダヤ人、社会主義国の貧困者があげられる。

〈貧困の文化〉論の個々の論点を項目別にしてみると、例えば子ども期の欠如(14)のように、時代制約的かつ階級限定的な視点から〈貧困の文化〉の特徴が定式化されていることに気づかされ、また、文化を永続的なものとみなす視点(2、8)や、特定の文化に属する人々を

一枚岩のものとして見なす視点（４）なども見られる。それらの賛否は後述するが、ルイスの著作に書かれた〈貧困の文化〉論は、貧困の背景にある構造的な要因を射程に含めたものであり（５、７）、従って貧困の個人要因論では決してないこと、そしてその力点が「希望」と「連帯」にあることを読み取ることができる（後述）。その２点に注意して、〈貧困の文化〉論をルイスに即して筆者なりにまとめておきたい。

ルイスによると、〈貧困の文化〉とは「成層化し、高度に個体化した資本主義社会における貧民が、自らの周辺的地位に対して示す適応と反発」（Lewis 1965=1970: 34）であり、それは貧困という「共通の問題に対する共通の適応」（ibid: 33）であるという。〈貧困の文化〉は、貧民が生きていくための防衛機制を持っており、世代から世代へ受け継がれていき、それはまた地域的（農村—都市）、あるいは国民的差異を超えた普遍的な特性を持っているとルイスは主張する。

〈貧困の文化〉を有す者の主たる特徴として、現在への志向性が強いこと、欲求充足を先へ延ばし未来の計画をする能力が比較的少ないこと、早い時期の性体験、女性中心の家族形態、権威主義的傾向、プライバシーの欠如、弱い自我構造、疎外感、あきらめの気持ちと宿命論などを挙げている（ibid: 38）。しかし、経済的貧困と〈貧困の文化〉は区別すべきであり、「非常に貧しい層」で〈貧困の文化〉を持たない人びとも存在するという。

貧しい人々が階級意識を持ったり、労働組合組織の活動的な一員となったり、世界全体に対して国際的な視野を持つようになれば、彼らはたとえ絶望的な貧しい状態にあっても、もはや貧しさの文化に属するものではない。宗教的、平和的、革命的のいずれでもあれ、何かの運動が貧しい人々を組織化し、彼らに希望を与え、団結意識と、より大きな集団への一

体感を効果的に促進するときに、貧しさの文化の心理的、社会的な核は破壊される。（ibid: 38）

このように〈貧困の文化〉の核心は「希望」と「団結意識（＝連帯感）」の有無にあり、行動様式や経済的な貧しさのみではないことをルイスは強調している。したがって「アメリカのように伝統的に地位上昇の観念と民主主義思想を持つ国においては（中略）上昇意欲が高いことなどの理由により、多数の貧民がいるにもかかわらず、貧しさの文化と呼ぶものはほとんど見られ」（ibid: 41）ず、また「下層階級こそ人類の希望であるといって讃える教義」（ibid: 40）を教え、「指導者たちに大きな信頼を寄せており、未来にはよりましな生活が待っているという希望」（ibid: 39-40）を多くの人びとが持つ社会主義国家でも〈貧困の文化〉は存在しないとルイスは言う。

〈貧困の文化〉論の核となっているのは「野心の少なさ、あきらめの気持ちや宿命論」であり、ルイスはそれらを鍵概念として度々指摘している。そしてそれらは「希望（宗教的な救済でも地位達成願望でも運動的な目標でもよい）」という将来に対する見通しによって変わってくるものであり、「希望」の有無が〈貧困の文化〉を持つかどうかの分水嶺となっているのである。

しかし、一読して分かるように、この視点は実際に「貧困」状態にあるか否かではなく、「希望」を有するかどうかを強調するために、容易く「犠牲者非難」へと横滑りしてしまう可能性を内包してもいる。

### 3. 〈貧困の文化〉の受容過程

さて、こうした特徴をもつ〈貧困の文化〉論は、当時のアメリカ社会にどのように広がり、どのように“活用”されたのであろうか。

貧困状態に陥った人々は、人種や国境を越えて類似した行動傾向や性格を示す、というルイスの主張は、経済成長を続けながらも根強く残

存する貧困問題（と、その背後に横たわる人種問題）が大きな社会的課題となっていた60年代アメリカで「時の理論」として受け入れられることとなる。その過程を西村貴直は丁寧にまとめているので、西村（2013）に即して整理しておきたい。

1962年、M. ハリントンは『もう一つのアメリカ合衆国の貧困』において、豊かなはずのアメリカ社会に5,000万人近くの貧者が存在すると同時に、貧困層は特有の行動パターンや価値体系を有していることを明らかとした。そして、当時の貧困層の生活状況を説明するために、〈貧困の文化〉論が援用されたのである。そうしたハリントンの著作は、「経済成長がすべてを解決してくれるという、戦後一貫して多くの人々に抱かれ続けてきた楽観論に継承を鳴らし、貧困の問題が想像以上に深刻であること、それゆえ貧困問題に取り組むための社会改良政策の必要性と正当性を人々にアピールすることに大きく貢献した」（西村 2013: 179）のである。

その結果、貧困は個人の能力や資質ではなく、長らく貧困状態に置かれてきたことから生じた「文化」の問題であるという視点や、それが世代間で継承されているという認識を生んだ。さらに、貧困経験によって様々なダメージを受けている人々には、単に所得保障や雇用機会を提供するだけでは不十分であると同時に、「貧困の文化」を手放さない限り、どのような支援も意味をなさないことを示唆したのである。

ハリントンの著書を通して共有されたこのような視点は、ジョンソン大統領下での「貧困戦争」の具体的なプログラムの根拠とされ、メディケア、メディケイド、フードスタンプ等の取り組みが「貧困根絶」のための方法として採用されていくこととなる。

しかし『もう一つのアメリカ』では、貧困層に特徴的に見られる（特に「病的」な）行動様式を説明するために〈貧困の文化〉という概念が用いられ、そこを経由する過程で〈貧困の文化〉論が当初もっていた構造的な視点が捨像

されてしまった。

このようにして通俗化した〈貧困の文化〉論は、貧困者は特有の「文化」に則って生活を送っていると考え、その「文化」が病理的な心性や行動様式を導き、結果として貧困を永らえさせていることを問題視したのである。

この点に関してルイスは、「貧困」と〈貧困の文化〉の区別を強調することで、つまり「貧困」という経済的に剥奪された状態と、その結果生じる「文化」とをいったん切り分け、両者の関係性を考えることで、通俗化した〈貧困の文化〉論との違いを明確にしようとした<sup>3)</sup>。

ハリントンの用法は、私が当初意図したよりもやや広い、学術的ではない意味で使っていた。私としてはより厳密な概念類型として、特に貧しさと貧しさの文化の区別を重視しながら定義してみたい。  
(Lewis 1965=1970: 33)

#### 4. 〈貧困の文化〉論をめぐって

こうして広まった〈貧困の文化〉論は、その視点やそれが結果としてもつ政治的機能に対して、数多くの批判が投げかけられてきた<sup>4)</sup>。それらの批判を、P. Townsend は次の5点に端的にまとめている (Townsend 1979: 66-70)。

1. 調査手法が十分に統制されておらず、個人に焦点を当てすぎている。
2. 中産階級的な価値観から〈貧困の文化〉の諸特性が取り上げられている。
3. 事例が〈貧困の文化〉の存在を示すものばかりではない。
4. 〈貧困の文化〉に属しながらも、〈貧困の文化〉の特徴をもたない人々も存在する。
5. マジョリティの文化とは異なる〈貧困の文化〉が存在する、という考え方自体に矛盾がある。

これらの論点に対し、ルイスが部分的に言及しているものもあれば（1、2、3）、そうでな

いものもあり（4、5）、その詳細を論じることが本稿の主旨からそれるため別稿に譲りたい<sup>5)</sup>。ここでは、〈貧困の文化〉論の背景を改めて確認することにより、ルイスの意図を汲み取っておきたい。というのも、それは Townsend による批判 2 の点に密接に関わるものであると同時に、他の論者によっても同様の批判が数多くなされてきたからである。

松岡（2001）は、〈貧困の文化〉論の背景には文化類型論（R. レッドフィールドや R. ベネディクトらの文化論）への反発があることを指摘している。人類学的研究において見られる多くの文化類型論は、社会の大多数の人々（多くの場合中産階級）に焦点が当てられており、そこから漏れ落ちる人々が（同じ文化に属しているながら）いるのである。

文化類型という抽象的なレベルで生活様式を記述すると、われわれの取り組む諸現象の確信である個々の人間が欠落することになると私は思った。文化類型全体を記述する際には、風習や行動形態の変動範囲が無視されるのはほとんど避け難いことで、そのために各文化の違いを強調し、人間としての根本的な類似性を無視し易い、誇張された文化構造を、あまりにも安易に持ち出すことになりかねないのである。（Lewis 1965=1970: 5）

こうした考えから、属する国家や地域は異なるものの、同様に「貧しい」状態に置かれた人々の生活の記述から得られた知見をもとにして、ルイスは帰納的に〈貧困の文化〉論を構築していったのである。

しかし、例えば母系中心の家族・歴史感覚の乏しさ・早期の性体験・現在志向性などを〈貧困の文化〉の特徴として挙げるその視点自体が、中産階級的な視点—勤勉や努力、将来における成功を称揚する中産階級的な価値観との差異—から導かれているという批判は誤ってはいない。

しかし、そうした“まなざし”の問題は、それこそ文化類型論において特定の「文化」—例えば「恥の文化」（R. ベネディクト）—の諸特徴を切り取る過程においても同様に見られるものであり、〈貧困の文化〉論への批判というよりも、人類学における「文化」概念とその定式化の問題でもあろう。

そもそも、ルイスはその“視点”に関して、次のように述べている。

中産階級の人々（この中には大部分の社会学者が当然含まれるであろうが）は、貧しさの文化の否定的側面を強調する傾向がある。彼らは現在志向性、あるいは抽象ではなく具体志向性などの特徴を、否定的な価値と結び付けようとする。私はなにも貧しさの文化を理想化したり美化したりするつもりはない。誰かも言ったように「貧困を讃えることはその中に生きることよりも容易である。」しかしながら、これらの諸特徴から滲み出る積極的側面のあるものは見逃されるべきではない。現在の刹那に生きることは自発性と冒険心、官能的な喜びを味わい衝動を充足させる能力を伸ばしてくれるかもしれないのである。そしてこの能力は、中産階級の未来志向型の人間においては、しばしば鈍磨されているものである。（ibid: 41-42）

ルイスは決して〈貧困の文化〉を称揚しているわけではない。むしろそれは社会的な不利や不平等の結果であると考えていた。しかしそうした培われた〈貧困の文化〉を一たとえそれが中産階級的な視点からの定式化であったとしても—他の階級文化と比べることや、価値判断をすること自体が無意味であると考えていたのである。むしろ、〈貧困の文化〉を劣位に位置づけること（あるいは逆に、特定の目的から称揚すること）こそが、文化的な序列を前提においた

視点であるだろう。

もっとも、ルイスのねらいがどのようなものであったにせよ、〈貧困の文化〉に属する人々に特徴的にみられる心的特性や行動様式、家族構成などの諸特性を数え上げるように挙げていくというルイスの記述は誤解（というよりも混乱）を招きやすいものであった。

しかし、ルイスが〈貧困の文化〉論を提唱したねらいが「中産階級の人々の啓発と貧困の理解に資すること」、「読者の貧困の理解を促すことを目指した」ものであったという「政治的な」意図があったこと（松岡 2001）を勘案すると、〈貧困の文化〉論の背後に潜む視線の偏りの問題は、ルイスの理論（あるいは「文化」の定式化の方法）への批判とはなりえても、そもそもの意図自体への批判とはなりえない。

本書の主要目的の一つは、非常に貧しい人たちと中産階級の人たち—教師、社会奉仕家、医師、牧師など貧しさの追放プログラムを実行する主要責任をになっている人たちとの間の断絶に橋渡しをすることにある。私の希望は貧困の文化の性質のよりよき理解が、やがて貧しい人々と彼らの問題に共感を持って接し、社会での建設的な行動のためのより合理的な基盤を造るようになることである。(Lewis 1965=1970: 2)

このようなルイスのねらいを考えるならば、〈貧困の文化〉を捉える際の視点の中産階級的なものであったこと—貧困根絶プログラムの実施を主に担う人々の視点から書かれていたこと—は、十分にうなずけることである。

ルイスは貧困の文化、特にその民族誌を単なる貧困研究の報告書であるとは考えていない。むしろ彼は民族誌を貧困の文化を解決するためのより積極的な手段とみなしているのである。言いかえれば、

ルイスの民族誌は貧困の文化に属する人々を間接的に救済するために書かれた書であり、彼が民族誌を一種の政治的手段としてみなしていることがルイスの主張から読み取れるのである。(松岡 2001: 49)

## 5. H. ガンズによる批判

アメリカの社会学者・H. ガンズは、貧困と文化とを結び付ける視点それ自体を厳しく批判し、〈貧困の文化〉論を、貧困に関する「文化主義的視点」だとしている。ここでは、ガンズの貧困論を仔細かつ包括的に論じている西村 (2013: 188-199) に基づいて、その批判を検討したい。

まずもって、文化主義的な視点とは、貧困層を取り巻く社会環境が変化したとしても、一度形成された「文化」は変化しにくいとする前提に立ち、貧困者がいったん身につけた「文化」を、それ以後の社会環境の変化に抵抗を示すものとしてみなすものである。したがって、「救貧対策」として職業や所得の保証だけでは不十分であると考えられる傾向にある。

しかし、そのように貧困と「文化」とを結びつけてしまうと、貧しい人々は幸福である、あるいは自ら進んで貧困を引き受けているのだとする保守的な偏見と結びつきやすく、人々が貧困化した理由を説明する場合に持ち出されることになり、それは結果として、国家による救貧の不要論を招き寄せてしまうことにもなる。

それを踏まえ、ガンズは社会環境の変化に対する「状況主義的視点」を支持する。この視点は、人々は置かれた環境と機会にそぐうように自身の行為を変化させるという前提に立ち、貧しい人々が有している文化がどのようなものであれ、職業と十分な所得さえ確保できるならば、貧困のもたらすさまざまな剥奪を被ることもなくなると考える。

W. Willson は、この対立する二つの視点に関して「ここ数年行われてきた激しい論争では、二つの見解のどちらかを明確に支持することが正しいことだと考えられてきた」(Willson 1987



＝1999: 306) と述べているが、はたしてこの二つの視点を対立的に捉えてよいのだろうか。より正確には、〈貧困の文化〉論は本当に状況主義的な視点と相反するものなのだろうか。

ガンズによる批判を詳しく検討すると、文化主義的な視点の問題点は次の2点に集約される。

- ① 願望 aspiration と行動規範とを常に一致したものと考えていること。
- ② 文化の概念をホーリスティックで体系的なものとしていること。

しかし、ルイスの著作を読み込むと、この二つの批判は、〈貧困の文化〉論それ自体には必ずしも当てはまらないことが分かる。

まず①の点に関しては、そもそもルイスは願望と行動規範とを同一視していない。むしろ、さまざまな資源の不在により何らかの願望が達成できないがゆえに、特定の行為をなし、特有の価値観をもたざるを得ないことを度々指摘している。

（〈貧困の文化〉とは）より大きな社会が価値あるものとし目標としているような成功を獲ち取ることはとうてい不可能であると認識した結果生じる、あきらめの気持ちと絶望感に立ち向かおうとする努力を表現している。(Lewis 1965=1970: 34)

貧しさの文化に属する人々は、中産階級的な価値を認識しており、それについて語り、それらのあるものは自分たちのものであると主張さえするが、全体としてそれにのっとって生活することはない。したがって彼らの言う所となす所を区別することが重要である。(ibid: 36)

〈貧しさの文化〉にみられる特徴的な行動様式は、人々が欲した行為では決してない。むしろ、それは「望ましい」とされる行動を達成できないがゆえに、そのように振舞わざるを得ないのである。

ルイスはむしろ、〈貧困の文化〉の鍵をあきらめの気持ちと宿命論としていた。そして、何らかの「希望」がそれらを破壊しようとして、〈貧困の文化〉を打ち消す社会的条件を明らかにしようと、常に心がけていたのである。

②の点に関しては両義的である。ルイスは確かに〈貧困の文化〉が世代間で継承されていくことを強調していた。しかし、それが永続するものなのかどうか、また全体論的であるか否かについては、両義的であった（どちらとも読み取れるため、矛盾していたと言ったほうが正確であろう）。したがって、ガンズが指摘するように、全体論的で永続するものとして文化を描いたと考えることも可能である<sup>9)</sup>、その逆もまた可能である。ただしルイスは、どのような形で、どのような内容の〈貧困の文化〉が生じてくるのかは、文化の背景にある歴史によって異なることを（後になって）主張していたし (ibid: 5)、また〈貧困の文化〉が変動しうることも一主として社会主義国において貧困状態に置かれた人々の状況に触れながら一指摘していたことは確認しておきたい。

社会の構造を根底から変え、富を再分配し、貧民を組織化して帰属感と、自信と、指導者意識を与えることによって、革命はしばしば、貧しさ自体を撲滅することはできなくとも、貧しさの文化の基本的特質をある程度排除することができるのである。(ibid: 43)

筆者は、ガンズによる批判が的をはずしていることを指摘したい訳ではない。ルイスの〈貧困の文化〉論は、当時の人類学の「文化」概念に規定されて、またルイス自身の論証と理論化の不徹底さから、さらには、それがもつ政治的な効果も相まって、もっと言えばルイス自身が〈貧困の文化〉を理論化した後、10年足らずで他界したこともあり、ルイスがこの理論で意図したことが十分に汲み取られてこなかった、と

というのが、本稿の結論である。

## 6. おわりに

〈貧困の文化〉論の概要とそれをめぐる論争の要点を概観してきた。ルイスの著作が正確に受容されてきたかどうかはさて置き、貧困研究の第一の目的をその根絶に置いた際に、あくまで文化論的に「貧困」を捉えようとするルイスの視点が危険と隣り合わせであり、かつ生産的な視点でもなかったことは十分にうなずける。ルイスは「貧困」そのものというよりむしろ、〈貧困の文化〉の根絶を追い求めていたのである。その意味で、〈貧困の文化〉は貧困というよりも「疎外の文化に近い」(Gans 1991: 312)というガンズの指摘は誤ってはいない。ルイスは、人々の生活をつぶさに観察し、それらを文化というフィルターを通して理解しようと努めた。そして、「貧困」にあえぐ人々が、より生き生きと生きることを願った一。

〈貧困の文化〉をめぐる問題の根底には、研究の最終的な到達点の違い(「貧困」の根絶か、「生き生きとした生活」を可能にする条件の実現か)にあったと理解することができる。

本稿は、〈貧困の文化〉論の視点に基づいた貧困研究が望ましいと主張しているわけではない。また逆に、ルイスの〈貧困の文化〉論の視点が、必然的に「犠牲者非難」に堕すとも考えない。ルイスは、貧困であるがゆえに、こうありたいという願いを達成することができず、しかしそれでも遅く生きる人々の悲哀と、生きるための願い(「希望」)こそを見ようとしたのである。

近年再び貧困と文化とを結び付けようとする動きがあるなか、ルイスの意図は、perceptionという概念で一部受け継がれようとしている。そしてその観点や「文化」概念の捉え方は、ガンズの視点とも軌を同じくしてもいる<sup>7)</sup>。D. Massey が指摘するように、貧困と文化とを結びつけることが「政治的に正しくない」可能性におびえる必要がない時代に、われわれは達し

たのである(NewYorkTimes 2010)。

60年代の流行と、その後の「見捨てられた」時代を経由し、〈貧困の文化〉論は、今やっと正しく批判され継承されようとしているのかもしれない。

## 注

- 1) 例えば、AAPSS (米国社会科学アカデミー) の2010年紀要は 'Reconsidering Culture and Poverty' をテーマとして編まれている。
- 2) 以上は Lewis, Oscar., 1938, *The Big Four*, New York: Alfred A Knopf. に基づいて一部が書かれた「what-when-how」のページより(原典は現在入手不可能)。(http://what-when-how.com/social-sciences/lewis-oscar-social-science/) [2013, November 15]
- 3) このことは、ルイスは貧困論ではなく、あくまで文化論として〈貧困の文化〉を考えていた証左でもある。しかしその視点は、貧困研究(者)にとっては一種の「ノイズ」でもあっただろう。
- 4) なお、通俗化した〈貧困の文化〉論に基づく批判は誤読一より正確には、その広まり方の問題一によるものであるため、本稿では取り上げない。
- 5) なお、タウンゼントによる批判はルイスの死後になされたものであり、その批判に直接的に回答しているものは存在しない。
- 6) 例えば次のような記述である。「人類学者として私は貧困とそれに伴う諸性質を一つの文化、より正確にはそれ自身の構造と根本原理を持つ部分文化として、家系に沿って世代から世代へ受け継がれる一つの生活様式として理解しようと努めてきた」(Lewis 1965=1970: 31)。
- 7) 詳しくはHarding (2010)を参照。なお、こうした視点は既に岩田正美によって次のように指摘されている。「貧困の文化論は、貧困の主要な原因である社会構造の解明と矛盾するものではない。社会構造そのものが、これを解釈し、維持する人間の行動や文化によって支えられていると考えられる。」(岩田 2007: 883)

## 引用・参考文献

- Gans, Herbert, J., (1982) *The Urban Villagers: Group and Class in the Life of Italian-Americans*, New York: Free Press of Glencoe. = 松本康訳 (2006) 『都市の村人たち: イタリア系アメリカ人の階級文化と

- 都市再開発』ハーベスト社。
- Harding, David, Lamont, Michèle, Small, Mario (2010) 'Reconsidering Culture and Poverty' *The ANNALS of the American Academy of Political and Social Science* vol. 629.
- 岩田正美「貧困の文化」岡本民夫ほか編 (2007)『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版。
- Lewis, Oscar, (1965-1966) *La Vida: A Puerto Rican Family in the Culture of Poverty - San Juan and New York*, New York: Random House. = 行方昭夫ほか訳 (1970)『ラ・ビーダ(1) プエルト・リコの一家族の物語』みすず書房。
- 松岡陽子 (2001)「オスカー・ルイス再考：貧困の文化の政治性」『文学部論叢』72, 35-50頁, 熊本大学文学部。
- New York Times (2010, October 17.) 'Culture of Poverty' Makes a Comeback.  
<<http://www.nytimes.com/2010/10/18/us/18poverty.html>> [2013, November 13]
- 西村貴直 (2013)『貧困をどのように捉えるか：H. ガンズの貧困論』春風社。
- Townsend, Peter (1979) *Poverty in the United Kingdom: A Survey of Household Resources and Standards of Living*, Middlesex: Penguin Books.
- Valentin, Charles, A., (1968) *Culture and Poverty: Critique and Counter Proposal*, Chicago: University of Chicago Press.
- Wilson, William, J. (1987) *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*, Chicago: The University of Chicago Press. = 青木秀男監訳 (1999)『アメリカのアンダークラス—本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店。